国際医療福祉大学審査学位論文（博士）
2019 年度大学院医療福祉学研究科博士課程・抄録

題目：看護学演習における看護学教員に求められる ファシリテーションスキル尺度の開発

保健医療学専攻・看護学分野・看護教育学領域
氏名：青木　恵美子

キーワード：看護学教員　看護学演習　ファシリテーションスキル　尺度開発

１．研究の背景と目的

保健医療サービスに対する量的･質的な需要は増大･多様化し、今日の看護基礎教育においては、社会のニーズに応えられる実践力の強化が中心的な課題となっている。アクティブラーニングや実践に即したシミュレーション教育などが導入されている。また、看護基礎教育では演習の時間が多く、効果的な教育を推進するために看護学教員（以下、教員)には高いファシリテーションスキルが求められている。ファシリテーションは、1940 年代 K.レヴィンを中心とする心理学者から始まり、日本では 2000 年以降、企業内での組織開発において発展してきた。教育界ではアクティブラーニングとファシリテーションを結び付けた教育支援ツール等の開発が行われている。看護基礎教育における先行研究では、講義･演習･実習カンファレンス、事例検討会などにおける教員のファシリテータとしての役割の必要性が報告されているが、教員のファシリテーション能力向上の為の具体的な方策や課題は明らかになっていない。そこで、本研究は看護学演習における看護学教員に求められるファシリテーションスキル(以下、FS）を測定する尺度を開発し、妥当性と信頼性を検討する事を目的とした。看護教育における演習は、学生の主体的な学習を多様に展開できる学習形態であると共に、知識･関心･精神運動領域の学習を統合する機会であるためこの場面を取り上げた。

２．方法

本研究は、２段階からなる。第１段階は、看護学演習における看護学教員に求められる FS の構成概念を整理し尺度原案を作成することであった。ファシリテーションを用いた教育、教授方法、研修場面等をキーワードとして、先行研究から学習者支援に向けて具体的に実践している FS を抽出した。また、看護系大学教員 12 名に演習場面におけるファシリテータとしての役割について半構成的インタビューを実施し、324 コード、43 サブカテゴリ―、15 カテゴリーを抽出した。これらの結果をガニエの 9 教授事象、ファシリテータの発言分類を用い質問内容を整理した。仮定の尺度枠組みとして 10 概念 88 項目を作成した。看護学教員 21 名へのプレテストを実施し、77 項目の尺度原案を作成した。第２段階は、看護学演習における看護学教員に求められる FS 尺度を開発し妥当性と信頼性を検討することであった。調査１と調査２からなり、調査１は FS 尺度の開発、調査２は再テスト法による再現性と安定性を検討した。調査１は、全国の看護基礎教育に携わる経験 3 年以上の教員に郵送による無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は、基本属性、FS77 項目に加えて、基準関連妥当性を確認するため教授活動自己評価尺度グループワーク用を用いた。分析は、記述統計を算出後、それぞれの概念に基づき確認的因子分析によるモデルの適合度を確認した。調査２は、便宜的抽出法による看護系大学、看護専門学校に勤務している教員を対象とし、第１回目の回答の 1 週間後に質問紙への回答を依頼した。分析は、1 回目と 2 回目の FS 尺度の各因子得点および尺度合計点における級内相関係数を算出した。

３．倫理的配慮：国際医療福祉大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。(承認番号 16-Io-185、18-Ig-86)

４．結果

１)第 1 段階：FS 尺度原案作成時の定義は「看護学教員における FS とは、学習者同士の相互作用を促進し、主体性や創造性を引き出すための、学習の環境、対象、プロセスへの働きかけである。その結果として、学習者は看護に関する課題を追求し、協働し、教え合い、創造し、表現するといった学習活動を通して、自らの問題解決能力、看護実践能力、看護観を養うことができる」とした。また、本研究の構成概念を「創造的な話し合いに繋げるためのゆとりのある場づくりスキル(11 項目)」「安全で安心して発言できる場づくりスキル(6)」「学習者のレディネスに沿った授業進行の準備スキル(7)」「学習者の興味を引き付けるスキル(5)」「学習者の発言を揺さぶり他の学生と共有するスキル(11)」「論点の方向を敏感に把握し話し合いの相互作用を促進するためのスキル(11)」「学習者を巻き込み議論を深めるスキル(6)」「教員間で演習の展開を共有し，学習の成果をつなぎ収束に導くスキル(7)」「効果的なリフレクションを通して次の課題を明らかにするスキル(6)」「ファシリテータとしての基本的な振る舞いスキル(9)」の 10 概念 77 項目を FS 尺度原案とした。

２)第 2 段階：回収率は 900 名（38.2%）、有効回答は 855 名（95%）であった。第 1 段階で作成した尺度原案 77 項目は天井効果を示す項目が多数みられたが、本尺度において重要な項目であるため残し当初作成した概念に基づき確認的因子分析を行った。その結果を修正指数、推定値を参考に修正し、28 項目を削除し 10 因子 49 項目の適度な適合性が示されたモデルを作成した。各下位因子は「時間のゆとりある学習の場をつくるスキル（4 項目)」「安全・安心に発言できる場をつくるスキル（4)」「目標到達に向けて学習者の学びを把握するスキル（4)」「学習者の興味を引きつけるスキル（5)」「学習者の状況を把握したうえで話し合いを仕掛けるスキル（6)」「学習者の主体的な発言を促し学習者同士の相互作用を促進するスキル（6)」「学習者の意見や可能性を引き出すスキル（5)」「教員間でのファシリテータ役割を共有するスキル（5)」「効果的なリフレクションを支援するスキル（4)」「ファシリテータとしての基本的な振る舞いのスキル（6)」であった。

因子構造モデルは、FS に影響を与える 3 つの下位尺度と 10 の下位因子からなる高次因子モデルを作成した。適合度は、GFI＝.876,AGFI＝.862,CFI＝.910,RMSEA＝.042,AIC＝3021.452 であった。下位因子間には中程度の関連 r =.32~.67 が示された。FS 尺度合計点と外的基準合計点との相関係数は r =.72 であり、下位因子と外的基準合計点との相関係数は r =.42～.64 であり有意な相関がみられた。FS 尺度 49 項目の全体の Cronbach α 係数は.951 で、下位因子の Cronbach α 係数は.73～.89 であった。調査 2 においては、2 回の回答が得られた 36 名（回収率 88%）を分析対象とした。級内相関係数は、尺度全体で r ＝.880, 各因子 r ＝.704～.843 であった。

５．考察

本研究では、確認的因子分析を行い、得られた因子モデルでテストー再テスト法を行った。その結果 10 因子 49 項目からなる FS 尺度の確認的因子分析の適合度は、CFI.90 以上、RMSEA.05 以下であることからも本尺度は適合度が良好であるといえ、一程度の構成概念妥当性は得られたと考えられる。また、基準関連妥当性が確認できた。さらに、信頼性および再現性は十分に確保でき、本尺度は演習における看護学教員の FS を測定するための有効な尺度であると考える。また、看護学演習における看護学教員の FS に関する状態を測定できる尺度であると考えられた。

６．結語

本研究によって、一定の妥当性と信頼性を持つ看護学演習における看護学教員に求められる FS 尺度 49 項目を開発した。尺度構成は『演習指導計画立案における FS』『学習者主体の学習を促進する FS』『ファシリテータとしての基本的な振る舞いのスキル』の 3 つの下位尺度が確認できた。